

牛若丸(義経)と弁慶

飯縄寺に残る牛若丸伝説と伊八の彫刻

岬地区には大ナマズの民話が伝えられています。昔、夷隅川には大きなナマズがすんでいて、村人から食べ物やお酒、若い娘をみつがせて、要求に応じないと暴れて川の水をあふれさせたり、山津波を起こすというとんでもなく悪いヤツでした。

そこに京都から奥州（岩手県南部）に行く途中に清水寺に立ち寄った牛若丸と弁慶がその話を聞きます。清水寺の大吊り鐘を運ばせ、弁慶の怪力で大ナマズにかぶせ、みごとに退治します。

鐘を運んだ人は「大鐘」という姓をもらい、大ナマズを鐘ごと深く沈めたその場所は、現在の轟橋のそばで「鐘ガ淵」と呼ばれています。（太東岬物語）

牛若丸と弁慶は和泉の飯縄寺に宿泊し、弁慶は牛若丸が京都の鞍馬寺で天狗を相手に修行した様子を絵馬に描いたそうです。絵馬は残っていませんが、弁慶と牛若丸の絵馬や天狗の面があり、飯縄寺は「天狗のお寺」と呼ばれています。

寛政8年（1796年）「波の伊八」と呼ばれ北斎に影響を与えたとされる「武志伊八郎」が、その話をもとに長さ1×4mのけやきの一枚板（本堂欄間）に、牛若丸と大天狗の大彫刻の傑作を残します。初代「波の伊八」が45歳の時の作品です。



欄間彫刻「大天狗と牛若丸」 飯縄寺案内より



飯縄寺



天狗の面

参考：『太東岬物語』小島良一・岬町歴史民族研究会 竹書房

『飯縄寺案内』飯縄寺